

礼拝

令和8年5月11日
2号



愚者の自覚

～ 素直な心で明るい生活を ～

新年度が始まり、気がつけばもう一ヶ月が過ぎました。新しい環境には慣れました。新しい環境には慣れました。慣れが生まれることは良い面もありますが、慣れてきたが故の身勝手さが生まれやすくなると思います。今一度、自分の言動を謙虚・誠実・親切に当てはめて振り返ってみましょう。

さて、仏さまの教えを物語風にまとめた説話集『百喻経(ひやくゆきょう)』という經典があります。その中に収められている「写像喩(しゃざうご)」という話から、明るく・正しく・仲よく生活するための教えを読み取ってみましょう。

『昔あるところに一人の絵師がいました。彼は王様から「私の肖像画を描け」

という大役を受けることになりました。いよいよ完成というときに、緊張のあまり、筆を滑らせて王様の顔の真ん中に黒い絵の具を落としてしまいました。真っ黒に汚れたキャンパスを見て、絵師は真っ青になります。「大変だ！王様に怒られる。なんとかして隠さなければ…」とあせった絵師は、急いでその黒い汚れの上に白い絵の具を厚く塗り重ねました。ところが、その白は不自然に浮き上がり、かえって汚れが目立つようになってしまいます。パニックになった絵師はさらに別の色を重ね、塗り直しを繰り返しましたが、描けば描くほど元の王様の顔からは程遠い、奇妙で醜い塊のような絵になってしまいました。結局、隠そうとすればするほど事態は悪化し、王様を深く失望させる結果となったのです。』

この物語において、王様の顔を汚した「黒い絵の具」は、私たちが日常生活でうっかりやってしまった間違いや失敗を象徴しています。そして、それを隠そうとして塗り重ねた「白い絵の具」は、その場を取り繕うための嘘や言い訳を意味しています。例えば宿題を忘れたときや友達に嫌なことを言ってしまったとき、咄嗟に「忘れたのではなく、家に置いてきただけ」「相手が先に変なことを言ったから」と、自分を正当化する色を塗ってしまったことはありませんか。一度嘘を塗ってしまうと、その嘘を本当らしく見せるために、さらに別の嘘を重ねなければならなくなります。そうして塗り重ねられた言い訳が厚くなればなるほど、本来の顔や心は見えなくなり、周囲からの信頼も失われていきます。

仏教がこの話を通じて教えているのは、間違ふことや失敗そのものの悪さではなく、その後に「その場をごまかそうとする心」や「自分を正当化しようとする心」、つまり自分の心の弱さなのです。黒い汚れをつけてしまったとき、一番正しい解決策は、上から何かを重ね塗りすることではなく、「汚してしまいました」とすぐに認めて素直に謝ることでした。正直に打ち明けられれば、描き直すチャンスも汚れを落とす時間も得られたはずですが、私たちは完璧ではありません。誰にも失敗をしてしまうことはあります。しかし、その失敗を隠そうとして嘘で塗り固める生き方を選べば、最後には自分でも何を隠したかったのか分からなくなったり、あるいは誠実さという自分の価値まで汚してしまうことになっていきます。失敗したときこそ、筆を止める勇氣を持つこと、言い訳という色を重ねるのをやめて素直に非を認めることが、結局は自分を一番正しく保つ方法であり、明るく・正しく・仲よい生活を送る最も大切なことなのです。